

保育心くあか

福岡市長 高島 宗一郎 氏 書

編集・発行 一般社団法人福岡市保育協会 福岡市中央区荒戸3丁目3-39 福岡市市民福祉プラザ6F 発行者 増本 律秀 編集者 楠野 吉弥



2025

こどものえがお展



vol.135 令和7年度 2号

南部療育センター取材	2~3
外国人の保育従事者について	4~5
青年部40周年	6
秋の叙勲	7

保育研究大会	8
私の園の取り組み	9
編集後記	9



南部療育センターに行ってきました

令和7年11月11日 機関誌専門委員9名

南部療育センター紹介

西尾 恭介

福岡市博多区三筑2丁目9番5号にある「南部療育センター」は、博多区南部や南区にお住まいの就学前のお子さんとその保護者を対象に、療育や発達支援を行っている施設です。地域の子どもたちが自分らしく成長していけるよう、医師や専門スタッフが連携し、一人ひとりの発達や特性に合わせた支援を行っています。

開館時間は午前9時から午後5時まで。土・日・祝日、そして年末年始（12月29日～1月3日）はお休みです。4階建ての建物内には、診察室や訓練室、保育室などが整備され、子どもたちが安心して過ごせる環境が整っています。

南部療育センターでは、3つの基本理念を掲げています。

① 診療・相談・訓練——保護者からの相談に対し、医師や専門スタッフが丁寧に対応し、必要に応じて個々の状況に合わせた療育や訓練を行います。

② 児童発達支援——運動発達や知的発達に遅れやかたよりのあるお子さんに対し、親子通園や単独通園を通し

て支援を行い、遊びや集団活動の中でより豊かな発達をめざします。

③ 地域支援——保育園や幼稚園、児童発達支援事業所などを訪問し、地域における障がい児支援の中核としての役割を担っています。

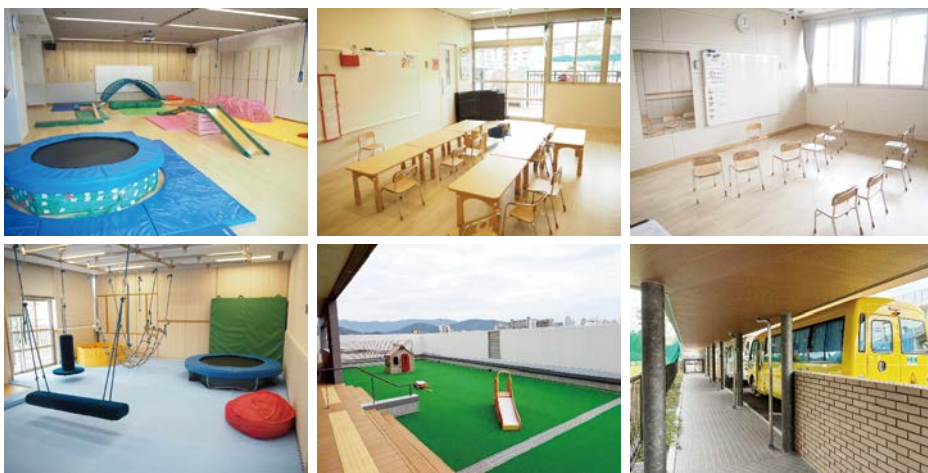
この南部療育センター通園部門は、通称「あゆみ園」と呼ばれています。あゆみ園の療育目標は「未来へ、社会へ好きなことへあゆみつつけること」。この言葉には、子どもたちが将来へ向けて、自分の力で一歩ずつ進んでいってほしいという願いが込められています。



施設設備や支援体制について

山口 健太郎

南部療育センターの施設全体の設備や支援体制について説明します。館内は、民間施設ではなかなか整備が難しいほどの広さと多機能性を備えており、ゆとりある空間の中で多様な支援を展開できるよう工夫されている点が印象的でした。



保育室や園庭に加えて、多機能療育室、感覚統合室、運動・言語療法室、広い遊戯室、屋内プール、屋上園庭など、子どもの発達段階や特性に応じた活動ができる設備が非常に充実しています。各室は目的に合わせて広さや構造が丁寧に工夫されており、個別支援から集団活動まで幅広く対応できるつくりになっていました。また、動線が分かりやすく、安全面に配慮した配置であることも特徴的でした。

さらに、研修室や保護者交流室が確保されている点も大きな特徴です。職員研修の実施や、保護者同士および支援者との情報共有の場として活用できる環境が整っており、家庭と施設が連携しながら子どもたちを支えていくというセンターの姿勢が感じられました。

今回の取材では、福岡市南部療育センター（あゆみ園）が多機能で柔軟な支援を実現するための設備や環境を備えていることを改めて確認することができました。

あゆみ園（通園部門）の支援内容

吉岡 大作

個別支援計画

園児一人ひとりに合わせた支援を行うため、入所時に「個別支援計画」を作成します。発達段階やニーズに応じた目標が設定され、日々の療育活動が計画に沿って実施されています。



- ・発達評価・園児の発達段階を丁寧に評価し、支援が必要な部分を明確にされます。
- ・個別目標設定・園児の成長を促すための具体的な目標を設定されます。
- ・モニタリング・定期的に進捗状況を確認し、必要に応じて支援内容が見直されます。

集団活動

- ・グループ遊び・室内では、保育者が力士になりきって一人ずつ順番に相撲を取る遊びが行われていました。待っている園児は「がんばれ！」と声援を送り、楽しみながら他者との関わり方を学んでいました。

- ・集団のルールを守る・園庭では芋ほりこつこが行われ、砂場に埋められ

た芋づる型の遊具を、友だちと力を合わせて引つ張り出していました。集団活動を通して、協力やルール理解など、社会生活に必要なスキルを身につけています。

個別的な関わり

支援が必要な場面では、保育者と園児が1対1で関わり、安心できる環境が整えられていました。その子のペースを尊重しながら、集中して取り組めるよう配慮されていました。

安心して過ごせる居場所

- ・ユニバーサルデザイン遊具・園庭には、車いすのまま使える砂場やネット型のブランコなど、障害や体力差にかかわらず誰もが楽しめる遊具があります。子どもたちは思いきり身体を動かしながら、笑顔で遊び込んでいました。

- ・クールダウンスポット・音や光、視線を遮断できるスペースが設けられており、感覚過敏などでストレスを感じやすいお子さまが心を落ち着けることができる場所として機能しているとのことでした。

発達に応じた多様なプログラムを通して、子どもたちの社会性や自立を育む大切な場所となっていました。また、保護者との連携を重視し、家庭でも取り組める支援方法を共有することで、地域全体で子どもの成長を支えられているようでした。

あゆみ園の保護者支援

加藤 信裕

あゆみ園では手厚い保護者支援を行っています。単独通園の園児は2台の園バスにて送迎を行っています。見学して驚いたのが、保護者用の保護者交流室です。眺めの良い4階に設けてあり、リラククスできる明るいスペースです。テーブルに加え畳の小上がりもあり、保護者はその子の活動の間、ここでお昼を摂ったりお茶を飲みながら他の保護者と交流し、忙しい育児の中、くつろぎの時間を過ごすことができます。

保護者との個別面談は年3回実施されています。個別支援計画書に基づき、その子の発達の状況を見ながら保育士・児童指導員など児童発達支援の専門スタッフを交えた率直な意見交換がされています。

また、あゆみ園の単独通園を利用する世帯の就労を支援するため15時〜18時までお預かりする事業を行っています。

取材を通して

南部療育センターでは、相談支援専門員、コーディネーター、訪問支援員、発達相談員、ケースワーカー、保育士、児童指導員、理学療法士、言語聴覚士など、延べ65名の専門職が働いています。多職種が連携し、医療・福祉の視点から子どもと家庭を総合的に

支える体制が整っています。

子どもの「今」だけでなく「これから」を見据えた支援を大切にし、発達の段階に合わせて個々に合った関わりを行います。「できること」「得意なこと」「好きなこと」を見つけるサポートを通して、人と関わる楽しさや達成する喜びを感じながら、心も体も育っていきけるよう支援しています。

地域の子どもたちが安心して笑顔で過ごせるように……。南部療育センター（あゆみ園）は、これからも家庭や地域と手を取り合いながら、一人ひとりの「あゆみ」をあたたく支えていきます。

とても充実した環境で手厚い保護者支援がなされていると感じました。ぜひ南部療育センター（あゆみ園）の皆さまから、さぼりと保育に悩んでいる多くの保育園・認定こども園の保育士・スタッフにアドバイスを頂けたら良いなと思いました。



異なる文化とともに育つ、保育の新しい可能性 外国人材登用の挑戦

青柳 徳晃

佐賀県佐賀市にある新栄保育園（保育所型認定こども園）。同園の副園長であり、佐賀県保育会青年部長を務める高田昌典先生に、県内で静かに始まっている外国人材活用の取り組みについて話を伺った。

この試みは、単なる人材確保策ではない。その根底にあるのは、「異なる文化や価値観に触れることが、子どもと職員双方の学びを深める」という、保育そのものへの問いかけである。



■はじめは、国際化する「日常」から
外国人材受け入れのきっかけは、近年、外国籍を持つ子どもを預かる機会が増えてきたことだった。

言葉や文化の違いを背景に、子どもや保護者が不安を抱える場面もある。そこで、「子どもたちだけでなく、職員側も多様な文化に日常的に触れる環境をつくれぬか」と考えたのが出発点。

職員に外国籍の人材を迎え入れるこ

とで、園全体が自然な国際交流の場となる。異なる価値観に触れながら育つ経験は、子どもたちの国際的な視野を広げ、多様性を尊重する姿勢や異文化コミュニケーションの基礎を育む。その教育的意義を、高田先生は何より大切にしている。

■人材不足という現実と向き合いながら
一方で、日本の保育現場が直面している人材不足という現実も、この取り組みを考えるうえで避けて通れない背景として存在する。

少子化と人口減少が急速に進む日本において、保育人材の確保は年々深刻さを増している。佐賀県も例外ではなく、地域によっては保育士のみならず、保育補助者の確保すら困難な園も少なくない。

こうした状況の中で、「将来、保育現場はどのような人材とともに成り立っていくのか」「今のうちに、どのような準備ができるのか」という問いが、現場の園長・副園長たちの間で共有されていった。

■公式事業ではない「先行的な挑戦」

この動きは、佐賀県保育協会が公式に推進している事業ではない。将来的に外国籍職員を雇用する機会が増えることを見据え、一部の園長・副園長が先行的に経験を積むために集まり、取

り組みを始めている。

現在、県内で約6園が参加し、外国政府認定送出国機関TRAMINGCO GROUPの協力のもと、7〜8名のベトナム人がインターン生（保育補助）として現場に入っている。

現行制度では、外国人が「保育士」として就労できる在留資格は存在していない。そのため、まずは保育補助としての就労実績を積み重ね、将来的に「保育士」という職種が就労要件に加えられることを目指す位置づけで進められている。

また、日本でのインターンシップ経験が、将来母国へ帰国した後に保育士として働く際の質の向上につながることも期待されている。

■補助金なし、園の負担。それでも手を挙げた理由

この取り組みに、特別な補助金はない。「保育補助者雇上強化事業補助金」の活用も検討されたが、インターン生は原則1年間の限定就労であるため対象外となり、活用は断念した。一方で、「保育体制強化事業補助金」の保育支援者枠であれば、条件次第で活用の可能性はあるという。

雇用形態は、参加園共通の「外国人雇用枠」を設け、月給制を採用。住居は法人契約とし、家賃の一部を園が負担している。

決して余裕のある経営状況ではない。それでも参加を決めた理由について、高田先生はこう語る。

「赤字の園では正直難しい取り組みです。ただ、ある程度余力のある今だ

からこそできる挑戦だと思っています。これは一園のためではなく、佐賀県全体の保育の将来を見据えた取り組みです」

■「不安だらけ」から始まった現場のリアル

受け入れ前、現場職員の間には多くの不安があった。

「コミュニケーションは取れるのか」「指示は理解できるのか」。そうした声が上がるのは、ごく自然なことだった。

来日当初、ベトナム人職員の日本語力はN3レベル（挨拶ができる程度）だったが、その吸収力は想像以上だった。受け入れから約4か月が経過した現在では、難しい言葉を除けば、日常的なやり取りはほぼ日本語で成立している。

「最近では『めっちゃ』という言葉を使っていて驚きました。子どもや職員の会話を聞いて覚えたのだと思います」
教科書には載っていない「生きた日本語」を使いながら、子どもたちと笑い合う姿。当初は戸惑っていた職員も、今では「翻訳機なんていらぬ」と笑い合っている。彼女を大切な仲間として受け入れていく。

■異文化がもたらした、保育の再発見

外国人職員の存在は、日本人職員にとっても新たな刺激となった。

これまで当たり前だと感じていた保育の方法や子どもとの関わり方を、異なる文化の視点から見つめ直す機会が生まれたのだ。

「言葉だけで通じない場面は、子ども相手でも多い。だからこそ、相手に伝わるよう丁寧に関わる姿勢は、相手が誰であつても変わりません。保育の基本が、そのまま異文化コミュニケーションにも活かしていると感じています」

芋掘りや樽太鼓、日本舞踊といった日本の伝統行事への参加は、外国人職員に新鮮な学びを与えると同時に、日本人職員が自国の文化を再認識する機会にもなっている。



■現場に立つホワイ先生の声

ベトナム人インターン生のホワイ先生は、仕事の難しさとやりがいとをこう語る。

「一番大変なのはコミュニケーションです。でも、一緒に遊んだり、子どもたちが名前を呼んでくれたりする瞬間が、とても嬉しいですね！」

保護者からの反応については、現在のところ特段の意見は出ていない。「学びのために来ている学生」という形で説明しており、理解は得られているという。

■見えてきた課題と、割り切り

この取り組みを通して高田先生が強く感じているのは、「外国人材の受け入れは決して簡単ではない」という現実だ。最大の課題は、やはり文化の違いだ。

座る際に片膝を立てる、食事中に茶碗を持たない——いずれも悪意のない文化的習慣だが、子どもにマナーを伝える保育の現場では、丁寧に向き合う必要がある。

「ここは日本であり、日本の文化がある。その前提は大切にしています」

将来的に外国人を保育士として正規雇用できるようにもなつたとしても、役割分担や支援の在り方を含めた検討は欠かせない。



高田副園長

ホワイ先生

■まとめ

違いを排除せず、違いから学ぶ保育へ

今回の取り組みは、表面的には「人材不足への対応」として語られることもある。しかし、現場に立つ高田先生たちの視線は、その先に向いている。

人が足りないから外国人材を受け入れるのではない。多様な文化や価値観とともに育つことが、これからの社会を生きる子どもたちにとって自然な環境であるべきだ——その考え方が、この挑戦の根底にある。

違いを排除するのではなく、違いから学び、共に育つ。佐賀の現場から始まったこの静かな試みは、日本の保育の在り方を問いかけている。

幼保インターシップ・プログラム

01 概要
本プログラムは、日本政府の正式な認可を受けて実施されるものであり、日本国内の幼稚園・保育園において、ベトナムの短期大学・大学に在学中の女子学生（2年生または3年生）を受け入れる。対象は、保育教諭養成課程または教員志望者に所属する学生であり、日本にて12か月間のインターンシップを行った後、母国に帰国し、引き続き学業を修め、卒業に至ることとなる。

02 目的

- 日本の教育現場や先進的な教授法に実際に体験することができる。
- 幼児の保育、教育、および健全な成長を支援するためのスキルを身につけることができる。
- 日常生活や、現地の先生・園児との直接的な交流を通じて、日本語能力を向上させることができる。
- 日本の文化、仕事の姿勢、高い責任感と規律を理解することができる。
- プログラム終了後、幼児教育分野での就職機会を広げることができる。

03 意義

- ベトナムの学生にとって、日本の幼稚園・保育園における実際の職場環境を学び、体験する貴重な機会となる。
- 現場でのスキルや教授法を身につけることで、園の運営や教育活動についてより深く理解でき、自身の強みや弱みを早期に自己評価することが可能となる。
- 卒業後の就職活動に備えるための貴重な準備となる。実習を通じて具体的な業務に直接関わることで、仕事に対する評価を得るとともに、必要とされるスキルを理解し、自身との適性を見極めることができる。
- さらに、不足している知識を補い、自己研鑽を重ねることで、より高いレベルへと成長することが可能となる。
- 将来のキャリア形成と就職機会の拡大に向けた基盤を築き、さらにベトナムと日本の発展に貢献することができる。

TRUONG GIA GROUP 株式会社 佐賀支社 (TRAMINCO GROUP, JSC)
 Hotline: (+84) 903-91-4245 | Email: thanhan@tramincogroup.com.vn
 Website: www.tramincogroup.vn | www.isora.edu.vn
 210 LE THUC HOACH, PHU THO HOA, HO CHI MINH, VIET NAM

幼保インターシップ プログラム

TRAMINCO GROUP
(送り出し機関の役割)

- 候補生の募集
- 面接者の選抜
- 入国書類作成
- 日本語・文化・生活教育

↓

幼保施設様

+

+

出国までの流れ

- 01** 候補者学生にこのプログラムの目的を説明致します。
- 02** 受け入れ先 幼保施設様に面接をして頂きます。
- 03** 日本語 文化 日本での生活の勉強をする
- 04** 出国手続き開始 出国まで6-7ヶ月
- 05** 1年の実習期間を終えベトナムに帰国し、大学卒業後、幼保教員になります

・ベトナムの若者の「夢の実現」をサポートします

・受入保育園様が安心して受入れてできるようサポートします

・ベトナムに帰国する保育園経験者の活躍をサポートします

TRUONG GIA GROUP 株式会社 佐賀支社 (TRAMINCO GROUP, JSC)
 Hotline: (+84) 24-6292-4182 | Hotline: (+84) 903-91-4245
 Website: www.tramincogroup.vn | www.isora.edu.vn
 210 LE THUC HOACH, PHU THO HOA, HO CHI MINH, VIET NAM

福岡市保育協会青年部四十周年記念式典及び祝賀会の開催

高山 拓人

令和七年十一月七日、ANAクラウンプラザホテル福岡において、福岡市保育協会青年部の創立四十周年記念式典及び祝賀会を開催いたしました。福岡市長（代理）をはじめ、衆・参両院の国会議員や、市議会議員、全国各地の青年部の先生方をお招きし、総勢百五十名ほどの皆さまにご参加いただきました。福岡市内からも青年部OB・OGを中心に多数のご臨席を賜り、盛会のうちに終えることができました。ご参加いただきました皆さまに、この場をお借りしまして改めて厚く御礼申し上げます。

記念式典では、ご来賓の皆さまよりあたたかいご祝辞を頂戴し、増本理事長より、歴代部長へ感謝状の贈呈も行われました。四十年という長い歴史を感じるとともに、改めて、これまで先輩方が紡いできた想いを継承し、進化させていく決意を固める会となりました。

また、記念式典と祝賀会の間には、記念講演も開催いたしました。今回は福岡女子商業高等学校の柴山翔太校長先生を講師にお迎えし、「ふつうを蹴り飛ばせ」をテーマにご講演いただきました。若干三十歳という若さで校長先生に就任した柴山先生のお話は、まさに「ふつう」ではないことばかりで、私たちが考えている学校現場からは想像



のつかないことばかりでした。挑戦しようと思える組織作り、前向きに仕事に向き合える環境作りの大切さを再認識すると同時に、その実現に向けたヒントをたくさんいただける講演となりました。

さらに、祝賀会では、青年部OB・OGの先生方から、青年部活動当時のエピソードを面白おかしくお聞きし、全国の青年部の先生方と交流を深めながら、青年部で活動しているからこそ得られる、学び・気づきに感謝を深める会となりました。

さて、ここからは現在の青年部活動について少しご紹介いたします。現在

青年部員は三十四名在籍しており、四十五歳未満の福岡市保育協会会員が推薦する保育関係者で構成されています。今年度は「保育NEXT」すべての子どもに輝く明日を「」を活動のローガンとして、年四回の通常研修に加えて他都市視察研修を行い、保育のこと、園の運営について、組織マネジメントなど様々なテーマで学びを深めています。このスローガンには、飛躍的にAI技術が発展し、不確実性が高まっている現代だからこそ、私たち保育者が次世代の社会を想像し、

Society 5.0を生きる子どもたちに必要な経験や体験は何なのかを考え、学んでいこうという思いが込められています。また、「多様性の時代」と言われるようになり、こども誰でも通園制度の開始やインクルーシブ保育の実現など、保育園やこども園に求められることも変化しています。保育園やこども園を中心に、地域に住む子どもたちが自分らしく輝けるために、私たちに何ができるのか、語りあっています。自分の学びたいテーマについて、柔軟な発想で学びを深められる組織であることは、諸先輩方が綿々と紡いでこられた青年部らしさであり、伝統であると思っています。青年部活動の詳細についてご興味のある方は、今回発行した四十周年記念誌をご覧ください。これまでの青年部活動の振り返りや、今後の青年部活動への展望など、内容盛りだくさんです。

末筆となりますが、四十周年記念式

典及び祝賀会を通して、青年部の活動が多くの保育関係者の皆さまに支えられていることを、改めて実感することができました。増本理事長をはじめ協会の皆さま、事務局の皆さま、青年部OB・OGを中心に協会会員園の皆さまなど、すべての関係者の皆さまに改めて厚く御礼申し上げますとともに、今後益々のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

※青年部では新しい仲間を募集しています。対象は市内会員園に所属する四十五歳未満の若手・次世代リーダーの先生方です。未来を担う先生方が仲間とともに学び合い、視野を広げていける大切な場となっております。ぜひ貴園の次代を担う先生方にもご参加いただければうれしく思います。



秋の叙勲受章

おめでとうございます

祝 瑞宝単光章



社会福祉法人ヒトトナリまごころ保育園 西熊 万由美

この度、令和七年秋の叙勲にあたり、瑞宝単光章という身に余る光栄を賜り、心より感激いたしております。

今日まで歩いてこられたのも、永きにわたり勤務を続ける中で、多くのご指導と温かいお力添えをくださったまごころ保育園の園長先生をはじめ、関係する皆様のおかげであり、感謝の念でいっぱいです。

これからも、こどもたちの笑顔に囲まれながら日々の保育に向き合える幸せを胸に、今回の受章に恥じることはないよう、より一層努力を重ねてまいります。

改めまして、これまで支えてくださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

祝 瑞宝単光章



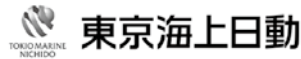
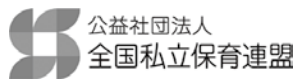
社会福祉法人金門会 星の原団地保育園 小幡 悦子

このたび、秋の叙勲に際し、瑞宝単光章の栄に浴することとなりました。誠にありがとうございました。

これまで主任保育士として務めてこられましたのも、ご指導して下さった諸先輩方や、共に歩んで下さった職員の皆様、温かく支えて下さった保護者の皆様、そして日々成長する子どもたちの存在があつてこそと、深く感謝しております。今後この受章を励みとし、微力ながら子どもたちの健やかな育ちのために尽力してまいります。



全私保連推奨 各種団体保険制度



ほいくのほけん・こどもえんのほけん

保育施設向け 4月1日～1年間 (中途加入可能)

Web加入可能

「園賠償責任保険」「園児団体傷害保険(学校契約団体傷害保険)」「職員団体傷害保険(総合生活保険)」など、保育施設における最大リスクを補償する1番の主力保険制度です。

やくいんのほけん

社会福祉法人向け 8月1日～1年間 (中途加入可能)

Web加入可能

社会福祉法人の役員の業務遂行に関する賠償リスクやマスコミ対応費用等のレピュテーションリスクに加えて、雇用関連トラブルによる法人への賠償リスクもオプション付帯可能な保険制度です。

えんじのほけん

在園児向け商品 4月1日～自動更新 (中途加入可能)

Web加入可能

「園内外問わず24時間お子さまをお守りする傷害保険」「扶養者に万が一の場合の育英費用補償」など手厚い補償内容に加え、一般的な保険商品と比較して約65%の割引となっているため非常に割安な保険制度です。

しょうがくせいのほけん

卒園児向け商品 4月1日～自動更新 (中途加入可能)

Web加入可能

24時間のおケガ等からお守りに加えて、学校からの貸出タブレットを含め個人賠償責任保険など卒園後のリスクを補償します。本商品も一般的な保険商品と比較して約30%の割引となっているため割安な保険制度です。

取扱代理店

有限会社ゼンポ

TEL: 03-3865-3881 FAX: 03-3865-2806



引受保険会社

東京海上日動火災保険株式会社

担当課支社: 公務二部 文教公務室 TEL: 03-3515-4134

この案内は施設賠償責任保険・生産物賠償責任保険・学校契約団体傷害保険特約付帯傷害保険・会社役員賠償責任保険・レピュテーション費用保険(レピュテーション費用特約条項付 費用・利益保険)・雇用関連賠償責任保険の概要・団体総合生活保険(傷害保険)の概要についてご紹介したものであり、全ての事項を記載しているものではありません。保険の内容は各保険制度のパンフレットをご覧ください。また、ご加入にあたっては、必ず「重要事項説明書」をよくお読みください。詳細は契約者である公益社団法人全国私立保育連盟にお渡しする保険約款によりますが、ご不明点がありましたら、取扱代理店または保険会社までお問い合わせください。

保育研究大会のみどころ

今年の発表は、中央区・博多区・早良区・西区の4グループの発表です。

【中央区】 テーマ：「子ども達の健やかな育ちのために」～保育者の保護者対応を見つめて～

リーダー：認定こども園サンタランド 小田周代/副リーダー：森のおうち保育園 飯野智子/講師：中村学園大学教育学部 児童幼児教育学科 教授 笠原正洋先生

この発表のポイントは、保育者が日々直面する「保護者対応の難しさ」を、ただ課題として捉えるのではなく、学びや成長のきっかけとして前向きに捉え直したところ。近年、児童虐待相談件数の増加や保護者支援の重要性が社会的に強調されるなかで、保育者は「本当に虐待なのか」「どこまで家庭に踏み込んでよいのか」といった迷いや不安を抱えていました。そこで私たちは、講義や模擬事例で理論と実践を結びつけ、さらに日々の保育を振り返ることで自己省察を深めました。

笠原先生のご講義から見えてきたことは、より良い保護者支援のために、傾聴と受容、信頼関係の積み重ね、背景理解、園内連携、ポジティブな声かけ、そして具体的なスキルの活用が大切であることです。特に「保育者は指導者ではなく伴走者である」という視点は、保護

者支援の本質を示す大切なことです。保護者対応の難しさは否定的なものではなく、むしろ保育者が自分の関わりを振り返り、保護者の尊厳を尊重する姿勢を育むきっかけとなります。

保育者の専門性を豊かにし、保護者との信頼関係を深めることは、子ども達の健やかな育ちを支える基盤となるものです。この大切な保護者対応についての深い学びを皆さまに発表し、共有出来たらと思います。



【博多区】 テーマ：「子ども主体の保育」を実現させるために

リーダー：しあわせな木保育園 河野直子/副リーダー：福岡比恵町雲母保育園 谷口ゆかり/講師：純真短期大学こども学科 准教授 飯塚恭一郎先生

昨今の保育現場では、「子ども主体」に着目し、主体性を育む保育の重要性が語られるようになってきています。「子ども主体」とは、どういう思いや考えて保育を実践することなのでしょう。私たちは「子ども主体の保育」を実現させるためにというテーマを掲げ、研究への取り組みを始めることにしましたが、「子ども主体」についてその意味や内容の具体的なイメージがつかみきれず、日々悩んでいました。

そんなある日、保育者が子どもたちに指示的な言葉かけをしている保育場面で、保育者と子どもたちの意見がぶつかり合っていました。この時、「これがやりたい」と自分の意見を主張する子どもたちの姿を目の当たりにし、自分の頭で考えて、その考えを自分の言葉で伝えることができる子どもたちの力と成長に驚き、感動しました。

今回のテーマである「子ども主体の保育」を実現させるために、研究員の先生方と長い時間をかけ、お互いの思い、考えを出し合う中で、共感、驚き、様々な刺激を受けることができた実りある研修でした。

当日の発表や論文を通して、この2年間の私たち研究員の心的変化にお気づきいただくと嬉しく思います。



【早良区】 テーマ：「子どもの主体性を尊重する保育の検討」～保育者のかかわりと環境構成を視点に～

リーダー：にこにこ保育園 大石容正/副リーダー：原中央保育園 高木綾加/講師：久留米大学人間健康学部 総合こども学科 助教 諫山裕美子先生

主体性とはデジタル大辞典(小学館)によると「自分の意志・判断で行動しようとする態度」と定義されており、近年保育現場や子どもを取り巻く環境において、主体性という言葉が耳にすることが多くなりました。しかし、実際の保育現場では、子どものどういう姿が主体性と言えるのかを改めて考える機会が少なく感じます。だからこそ子どもの姿から主体性について検討することに意義があるのではないかと思います。久留米大学の諫山裕美子先生をお迎えし、保育者のかかわりと環境構成を視点とした「子どもの主体性を尊重する保育」について研究に取り組みました。

研究の内容としては、各研究員が実際の保育現場で、子どもが主体性を発揮していると感じた場面の写真を撮り、研究用に作成した記録用紙にその時の状況、環境構成等を記録してもらい、持ち寄った記録用

紙を基にグループディスカッションを行いました。話し合いを行う事で様々な意見に触れる事ができ、それを参考にまた実際の保育現場で実践していくことで、定例会を重ねる度に主体性に関する考えもより柔軟で考察も深みが出てきたと感じました。

研究大会では2年間での変化をまとめ、みなさんにも主体性について考える機会になる発表が出来ればと考えております。



【西 区】 テーマ：「子どもの育ちを支える保護者の援助とは」～運動あそびを通して保育を見つめなおす～

リーダー：城の原保育園 下村史江/副リーダー：いき保育園 白水美香/講師：中村学園大学教育学部 児童幼児教育学科 准教授 西田明史先生

西区研究会では、昨年に引き続き、『運動あそび』をテーマとした研究に取り組みました。講師には、引き続きの中村学園大学教育学部の西田先生をお迎えし、アドバイスをいただきながら、グループワークを中心とした定例会を重ね、研究を行いました。

近年、子どもを取り巻く環境は、日々変化しています。外遊びの減少やデジタル化などによる遊びの変化、また、それに伴い子どもの身体的な能力や経験不足が見受けられます。

私たち保育士は、子ども達にどうかかわっていくべきなのか、という点に焦点を絞り、西区各園において子どもの様子やかかわりで工夫している点など、研究員との情報を交換しながら研究を進めてきました。

西区は、52か所の私立認可保育施設を有する大きな地域です。園の環境や規模も様々です。その中での研究でしたので、悩みや抱える課題もそれぞれでした。課題と向き合いながらの研究でしたが、研究員からの意見も活発で、とても楽しく有意義な時間を持つことができました。研究大会では、取り組みをご紹介します。



私の園の取り組み

光の園保育園（博多区） 荒木 紅子

本園がずっと大切にしている「お茶の作法」の取り組みについて紹介します。

年長児がお茶の先生に、まず襖の開け方や畳の座り方を学びます。最近では和室を知らない子どもが多いので、お茶室という日常と違う空間を知り、そこに新鮮さを感じ、床の間の花を見て季節感を味わっています。4月は正座や立ち方や座り方ができず、抹茶の味にも戸惑うことがあります。回を重ねる度に自然と正座ができ、お茶碗を丁寧に扱えるようになります。また、「お先に」「どうぞ」「お点前頂戴致します」など挨拶の掛け合いを心地よく感じ、おもてなしの心を身につけていきます。

1年かけて襖の開け方、床の拝見、お菓子の頂き方、お茶の点て方を学び、3学期には保護者を招待してお茶会を催します。やがて家庭でも、家族や祖父母にお茶を淹れるようになり、感激したという保護者の声も聞かれ、もてなすことの喜びを味わっていきます。

日頃意識することのない自分の体の動きや使い方をゆっくりと考え、自分のペースで理解していきながら所作が身につくことは、無駄のない、秩序だった動きを獲得し、情緒の安定にもつながっています。

自分の意志通りに出来るようになることは、子どもが自分の言動の主人公になることです。保育園でのお茶の作法の取り組みが、「おもてなしの心、美意識、自然への敬意、そして今ここを大切に生きる」という精神につながるよう、今後も大切に継承していこうと思います。



内浜保育園（西区） 川崎 若

私たちは、これまでの保育を振り返りながら、少しずつ保育を更新してきました。これが今の取り組みです。

子どもたちが安心できる環境の中で、自分で選び、想いを表現し、友達と関係を深めていけるよう、少しずつ取り組んできました。お部屋の環境は、子どもの発達やその時々々の興味関心に耳を傾けながら、工夫を重ねています。乳児には、安定した関わりの中で安心して主体的に行動できるよう、育児担当制を導入しました。幼児は異年齢クラスで過ごし、大きい子が小さい子を自然に助ける姿も見られます。その一方で、同年齢だけで取り組んできた活動のいくつかは継続が難しくなってきました。

今秋、新たに取り組みだしたのは、戸外遊びの環境づくりです。タイヤを持ち寄ってくれた先生もいます。また、子どもたちにもっといろいろな動きを試して欲しい、という先生たちの願いを受け、思い切って巧技台を一式購入しました。11月からは、ちょっと頑張れば

できるくらい、失敗しても大事にはならないくらいの組み合わせで、毎朝設置しています。乳児と幼児が交代するころには高さを変え、難易度を少し上げています。先生たちの狙い通り、子どもたちは楽しみながら挑戦しています。片付けはお昼過ぎ。手の空いた乳児の先生や事務員さんが協力して行っています。職員一人ひとりの子どもへの想いと努力の積み重ねに、心から敬意を抱きます。

これからも社会の変化に向き合いながら、子どもたちの成長を支える園でありたいと思います。



編集後記

年末年始の休みも終わり、子どもたちが元気に登園してくる姿を見ると、新たな気持ちになります。昨年後半は、熊の被害や青森県東方沖の地震など大変な出来事が続きましたが、今年は誰もが安心して過ごせるような年になってほしいです。

今回、令和7年度第2号を発行するにあたって、南部療育センター（あゆみ園）を見学させていただきました。通園してくる子どもたちや保護者に寄り添った環境が整っている充実した施設でした。屋上園庭やクールダウンスポット等保育園にもこんな場所があったらいいなと思うところばかりでした。先生方の手づくりのパーテーションはすぐにも真似できそうなものでしたので、作ってみたいです。今回の見学で得た知識を自園の環境作りに活かして、園に集まる全ての人にとって保育園が心安らぐ場所にあるように取り組んでいきたいと思っています。

機関紙編集に関わり、学ぶ機会をたくさんいただいたと思います。135号にも青年部40周年記念や保育研究大会の取り組みについて等、様々な記事が掲載されています。ぜひ、目を通して今後の保育に活かしていただけたら幸いです。

綿末 明子
(まいびるちとせ保育園)

～感想やご意見はこちらにお送りください～

【保育協会メールアドレス】 kyoukai@hoiku.or.jp